

魅
訪
探
力

独断による わがまち魅力探訪...

みなとまちと田園が出会う都市 新潟 ～新潟市の歴史と文化、そして食～

案内人 新潟県新潟市 斎藤 誠さん

第7回

秋田勉強会特集(No.25)に続く今月第2弾としてお贈ります。
まずは「わがまち魅力探訪」のコーナーです！
佐渡、長岡に続く越後3部作の完結編として、斎藤さんから新潟市をご案内していただきます。

▼支援Tシャツを着用し業務をおこなっています！

僭越ながら越後3部作の最後を飾らせていただきます、新潟市です。

先月の豪雨では新潟県内に大きな被害をもたらしましたが、市内では河川決壊などの甚大な被害はありませんでした。心配してくださった皆さん、ありがとうございました。

さて、新潟市役所では今夏、東北復興への支援と節電に市全体で取り組むため、支援Tシャツを作成し、着用して業務を行っています。東北へ活力(Vigor)を！というメッセージ通り、この記事でみなさんに少しでも活力を、そして新潟に来て更なる元気の充電をしてもらえばと思っています。



▲新潟西港と市中心部



▲新潟市内の田園風景



▲港カフェの風景



▲「水と土の芸術祭'09」の作品『在水一方』

▼ 1 新潟市の歴史

新潟市は、古くは北前船の寄港地として、そして幕末以降は開港五港の一つとして、人や物の交流拠点としての役割を担ってきました。その後、新潟港は**本州日本海側最大の港**に成長し、さらに国際空港の整備や、高速道路や新幹線といった陸上交通網の発達により、**国内主要都市と世界を結ぶ拠点都市**として発展を遂げてきました。

一方で農村部は、「地図がない湖」と呼ばれた芦沼を乾田化する人々の「死に物狂いの仕事(司馬遼太郎「街道を行く～潟のみち」より)」が実を結び、米どころ新潟の中でも有数の穀倉地帯へと変貌を遂げていました。

そして平成17年の市町村合併を経て、平成19年には本州日本海側初の政令指定都市に移行し、港を中心とした**都市と豊かな田園が共存し交流する新しい都市**を目指して、まちづくりが進められています。



▼ 2 新潟市を感じるイベント

△みなとをテーマにした夏のイベント

「**新潟みなと水遊記**」と名付けられた様々なイベントが、新潟市中心部を流れる信濃川の河口部、萬代橋から下流側の新潟西港エリアを舞台に9月30日まで開催されています。

第6回となる今年は水辺のカフェやコンサートを始め、復元された北前船みちのく丸の寄港も予定されています。

△水と土をテーマにした3年に1度のイベント

過去には先人たちが戦い、現在も時には今回の水害のように牙を向くこともあります。普段は豊かな実りをもたらしてくれる新潟市を語る上では欠かせない「水」と「土」をテーマに、**市内全域でアートイベント「水と土の芸術祭」**が開催されます。

次回の開催は**2012年**ですが、一部の作品は現在も鑑賞可能で、バスツアーなども実施されています。

▼ 3 そして新潟市の食！

みなさんお待たせしました。ちょっとマジメなレポートはこれくらいにしてここからは、新潟市の誇る食をご紹介します。(とは言え私が紹介できるのは経済的理由からB級グルメに限定されますが)

△新潟タレカツ丼

佐渡市さんが紹介していたブリカツ丼、長岡市で人気の洋風カツ丼と並び、**越後三大カツ丼**(?)の一つとして新潟市には**新潟タレカツ丼**が君臨しています。

なぜ新潟県内各地で独自のカツ丼文化が発達しているのかはわかりませんが、多分、お米がおいしいからと無理やり結論づけて、新潟タレカツ丼についてご紹介します。



▲激ウマ タレカツ丼★



新潟タレカツ丼とはご飯のうえに、タレにくぐらせたカツを数枚のせたカツ丼のことです。よくあるソースカツ丼とは違い、『醤油』をベースとした甘辛いタレにくぐらせているのが特徴です。卵でとじず、玉ねぎやキャベツもなく、主役のカツの魅力1本に絞ったシンプルかつ豪快な丼です。

新潟市ではとってもメジャーで、市役所職員用食堂で、「カツ丼」の食券ボタンを押すと、なんの断りもなくこの新潟タレカツ丼がでできます。でも市役所の食堂だからと言って侮るなかれ。甘辛タレが絶妙にカツに絡み、ご飯がいくらあっても足りません。

新潟市にお越しの際は、是非ご賞味ください。



▲カツ丼ボタンをポチッとな♪
(この日は売り切れでミニ丼でした…)

◇新潟市も名物！みかづきの「イタリアン」

先月の長岡市永井さんの熱いレポートからもフレンドの「イタリアン」を愛する長岡っ子の情熱が伝わってきましたが、新潟っ子にはみかづきの「イタリアン」がソウルフードとなっています。みかづきのイタリアンは太麺でモチモチした食感がソースによく合っていて、フォークで食べるせいもあるのかフレンドよりもよりファストフード的な印象が強い気がします。

【みかづきとフレンドの関係】

みかづきとフレンドの創業者は商業界のセミナーで知り合った親友で、本拠地が新潟と長岡で競合もないことから、イタリアンはそれぞれのお店の看板メニューとして友好的に発展してきました。

東北OMのような繋がりがいかに大切かと感じる逸話です。

ぜひ2つのイタリアンを食べ比べてください。



▲これがみかづきの「イタリアン」

←食の陣当日座の様子。昨年度は、タレカツvsブリカツvs洋風カツのカツ丼対決も行われました。

◇新潟市にはグルメやお酒がたくさん！

食のイベントで全てを味わってください！

そのほか新潟市にはここでは紹介しきれないほどのグルメや越乃寒梅を始めとした日本酒があります。そういったグルメが一堂に集結する食のイベントが数多く開催されていますので、ぜひ一度足を運んでみてください。

【新潟市が誇る食のイベント】

| イベント名 | 開催時期など |
|------------|------------------------------------|
| にいがた食の陣 | 年間開催。当日座は2月上旬 |
| にいがた酒の陣 | 例年3月中旬 |
| 新潟うまさぎつしり博 | 平成23年11月26～27日 |
| 新潟B級グルメ横町 | 新潟ふるさと村に常設。 他にも随時イベントが開催されています。 |



第8回OM勉強会 in ふくしま

日時 11月12日(Sat)～13日(Sun)

会場 コラッセ福島 4F 多目的ホール

テーマ 『震災後の福島を振り返り、
"いま"と"これから"を考える』

今回の福島勉強会では、現在の厳しい状況のなかで福島県を元気にするために活動されている方々にお越しいただき、現在の活動状況の報告と、福島の未来を語っていただく予定となっています。

その後、それらのお話を受けて、ワークショップを行っていただきますが、福島の未来を通して、一人ひとりにわがふるさとの未来を考えさせていただく機会を提供できればと考えております。

また、勉強会終了後の交流会、更には翌13日にはエクスカーションも行なわれる予定とのこと。

こちらも詳細が決定したいメールリストを通して、皆さんにお知らせいたしますので、ぜひお楽しみに♪

第4回ミニ勉強会&いも煮会

日時 10月9日(Sat)～10日(Sun)

会場 山形市内

ミニ勉強会は、OMメンバー内の自前形式の勉強会として開催するものです。今回のミニ勉強会では、OMメンバーによる研究発表、更にはファシグラ道場などを予定しております。

また、翌10日には、東北OM発足当初から毎年恒例となっている山形のいも煮を今年も開催します！

詳細が決定しましたらお知らせしますので、お楽しみに♪



東京財団週末学校に通う後藤好邦さん(山形市)が海外視察研修で多くのことを学ばれてきました。今回は、後藤さんから視察研修の模様をレポートしていただきます！

特命Report ポートランド視察を終えて

山形市役所 後藤 好邦さん

◆住民自治が息づく活気ある魅力的なまち ポートランド

バラの都、オレゴン州ポートランド。人口58万8千人の縁あふれるこのまちは、住民自らが地域のことを考え、話し合い、行動する、そんな住民自治が息づく活気ある魅力的な場所でした。

ポートランドにはネイバーフッドと呼ばれる自治区があります。そして、それぞれの地域には、地域住民に身近な問題(公園の管理や土地利用のあり方など)の検討や住民と行政とのさまざまな調整を行うネイバーフッド・アソシエーションという地域住民団体が存在しています。日本でいえば差し詰め自治会、町内会といった感じでしょうか。

ただし、日本の町内会と大きく違っているところがあります。それは、その組織のリーダーが住民の投票により選ばれているところです。そのため、ネイバーフッド・アソシエーションで下された最終決断は、地域を代表する意見となり、多方面にわたり拘束力を持つことになります。

◆住民同士の建設的な意見交換のプロセスを経て住民間の合意形成へ

このように大きな権限を有しているネイバーフッド・アソシエーションですが、住民の意思を代弁する機関として定期的にミーティングを開催し、きちんと住民の意見を集約する活動を行っています。

このミーティングには地域住民であれば誰でも参加でき、いろいろな話題(テーマ)について自らの意見を自由に発言することができます。

ポートランド滞在中、私自身、このミーティングに2度ほど参加しましたが(見学していただけですが…), このミーティングのなかで、住民同士による建設的な意見交換が行われている光景を目撃しました。このようなプロセスを経ることで、少数派の意見をくみ取りながら住民間の合意形成を図っているのだと感じたところです。なお、これらのミーティングには市関係者も参加し、それぞれのテーマに関して市の考え方をきちんと住民に伝えていました。

住民、市関係者共に、とてもラフな服装で参加し、自由闊達に意見を言い合う姿に住民と行政の距離の近さを感じました。ここが、日本とアメリカの大きな違いだと思います。

ポートランドでは多くのゲストスピーカーにたくさんの方に残るお話をいただきました。そのなかから、特別印象に残っているお話を2つご紹介したいと思います。1点目はコミッショナー(議員)のフリツツさんのお話です。

◆住民に対して常に誠意ある態度で臨むこと

ポートランドでは5人の議員がそれぞれ担当に分かれ、市役所のサービスセクションの長も務めています。そのためフリツツさんのもとでも多くの行政職員が働いています。彼女の話は、その部下となる行政職員に常々伝えているものです。



「行政職員は一人ひとりが行政の代表である。そのため一人の行動が行政のすべてをイメージさせてしまうことがある。そのことを常に意識しながら、住民に対して誠意ある態度で臨んでほしい。」

当たり前のことといえばそのとおりですが、このことを忘れている行政職員がたくさんいます。

私自身、現在、窓口のある職場に在籍していることから、市民の方と接する機会がたくさんあります。そのため、このフリツツさんの言葉をいつも意識しながら誠意ある態度で市民の方に臨んでいきたいと思います。

◆自治体職員は庭木や草花、苔が

生き生きと育つよう水まく庭師

2点目は、今回の研修のコーディネーターを務めていただいたダンさんのお話です。ダンさんはポートランドの職員もあります。

「まちづくりを庭に例えると、住民のリーダーが木、そのリーダーを支えるフォロワーや住民たちが木の周囲にある草花や苔、昆虫などである。そして、私たち自治体職員は、その庭の主役である木や草花、苔などが生き生きと育つように水や肥料をまく庭師である。」

この話を聞きし、私自身感じたことがあります。日本とポートランドとを比較すると、確かに文化や制度の違いはあります。しかし、一方で共通している部分がたくさんあると感じました。

◆住民の声に耳を傾け、公 (public) とは何か、

答えを探し続ける必要がある！

例えば、日本にはネイバーフッド・アソシエーションのような選挙で選ばれたリーダーが運営している組織はありませんが、自治会が中心となり、住民同士の協議の場はあるはずです。もしかしたら、それを、我々、行政にいる立場の人間が知らないだけなのかもしれません。



↑ 左から後藤さん・ダンさん・仲井さん(志摩市)



↑ マウントフット



↑ ファアウェルパーティーでの集合写真★

特命Report

もしくは知っていたとしても、それをPublicなものではないと勝手に決め付けて阻害要素としているのではないでしょうか。それをダンさんの比喩に当てはめると、庭に関する知識がない、あるいは大切な庭の木を切ってしまう、花びらを散らしてしまうような駄目な庭師になると思います。その点で、我々日本の自治体職員は、良い庭師となるために、もっと地域に出て住民の声に耳を傾け、「公(Public)とは何か」という答え探しを続ける必要があると思いました。

以上のように、いろいろな学びと気づきのあったポートランド研修でしたが、より詳しいお話を、いつかOMの活動でも紹介させていただければと考えております。その際に、是非、ポートランドという題材を使って、住民自治のあり方について楽しくディスカッションしましょう。

最後に、今回の研修で一番楽しかったことについてお話をします。

それは、ポートランド・ティンバース対LAギャラクシーの試合(サッカー)を観に行ったことでした。相手チームにベッカムがいたこともあります、それ以上にアメリカのスポーツ文化を感じることができたことが最高でした。

アメリカに行かれた際には、是非、スポーツ観戦をお勧めします。ビールとホットドック、そしてアメリカ人の盛り上がり。是非、味わってください。

今回の視察研修には、後藤さんのほかOMメンバーも参加しておりました☆
そんなメンバーの方々の感想も寄せていただいたので、ご紹介します♪



地域の“最適”のために私がやるべきこと、そのヒントがここにあった！

北上市役所 大沼 亮平さん

ポートランドを理想郷みたいに考えていました。しかし、実際にはホームレス等の問題も抱えているし、市民参加も必ずしも活発なものだけじゃない。そして、今回の研修でなぜ、協働を進めていく必要があるのか、そのためには本当に私たち公務員がすべきことはなにかを考えていました。

ヒントはありました。地域の会合を見学したのですが、話している内容が非常に細かい。息遣いが聞こえるほどに、リアルな情報です。生活者の視点での細かい話は、地元のプロで

ある地域の住民にしかわからない。そしてその結果を市に提案し、市が吸い上げる。

ここで私は気がつきました。政策を考える上で大事なのは、地域の住民の知恵×役所の専門的な情報を共有して、知恵を出すこと。そのために、私の役目は、あくまで職員の立場で話を聞き、場を作り、提案していくこと。役所が全てやることは、決してその地域にとってまあまあ、にはなっても最適にはならない。

今までこれをおろそかにしていなかったか？地元のプロとして住民を信頼していたか？役所の職員でなければできないこと、やってはいけないことをしっかり考えていたか？

私のこれからの課題は、これを問しながら役所をこつそり変えていくことです。



↑修了式を終え、研修生みんなで集合写真★



↑スタジアムでのサッカー観戦★

interview

研修の成果を咀嚼し、血肉化し、自分の地域で“協働の華”を咲かせてていきたい！

いわき市役所 長谷川政宣さん



米国オレゴン州ポートランド市にこの夏1週間ほど滞在しました。東京財団が主催する市区町村職員を対象とした研修プログラム「東京財団週末学校」による海外研修です。

人は人でしか感動しない。

改めて今回のプログラムに参加させていただいて実感したことです。研修生28名と事務局を合わせて30名以上の大勢の人間を受け入れてくれたのは、ポートランド州立大学

(Portland State University)のチームでした。

私たちの人数以上のスタッフが1週間にわたる各回の講義やグループワークの準備(通訳の手配、スピーカーの選定、会場の準備)、サイトビズ(現場視察)、毎夜の交歓会、卒業式(卒業証書まで作ってくださった)、最後のフェアウェルパーティなど献身的に尽力していただきました。半年以上も前から準備をしてくださったそうです。

じつは、到着2日目に私は体調を崩し熱を出していました。チームを統括し、同大学で教鞭を執る佐藤洋一さんがわざわざホテルの部屋まで来てください、味噌汁や手作りのおにぎりなどを届けてくださったのです。

海外で体調を崩すと現地の食べ物を受け付けなくなることは、以前留学していて自分自身経験済みでした。佐藤さんも長い米生活の中でそのことをわかっているしやつたのでしょう。

手作りのおにぎりを本当に有難くいただきました。お陰で翌日から研修に復帰することができました。

今回の海外研修のテーマの一つは、いかにして市民と行政が協働できるかということでした。

もちろん、市議会議員による講義やサイトビズ(現地視察)でも多くの示唆をいただきました。しかし、なによりも、ポートランド州立大学のチームの姿勢に私は多くのことを学びました。どのようにすれば相手の望むことが叶えられるか、どうすれば満足するか。常にそのことを考えながらの同大学のチームの対応に私は深く深く感銘を受けました。

そしてまた、これほどまでチームに真剣になっていたいのは、日本を変えるためには基礎自治体が変わるしかないという明確なビジョンのもと、東京財団側が同大学に対して「大切な使命を帯びた研修生が来るのよろしくお願いしたい」との熱い想いがあったからでもあります。

まさに、各関係機関の見事な協働によって素晴らしいプログラムが築き上げられ、私たち研修生は最高の成果を得ることができました。

今後は私たちの出番です。地元に戻り、この研修で得た成果を咀嚼し、血肉化し、自分の地域で協働の華を咲かせてまいりたいと思います。

八戸市役所 植 亜衣理 さん



↑植さん(右)と仲井さん(左)その①♪

みなさん、こんにちは。私からは、テーマ別調査を行ったコミュニティガーデン事業についてレポートしたいと思います。

ポートランドでは、緑のまちづくりの手法として地域住民が主体となって運営するコミュニティガーデン事業が盛んです。個人的なガーデニング活動はもちろん、街中の空地の有効活用として、さらに環境問題を学ぶ場として、コミュニティガーデンはポートランドに欠かせない存在です。

日本でいう、貸し農園やグリーンガーデン事業に近いかもしれません、あくまでも行政支援は土地提供や水道施設の整備など最低限のものに留まり、基本的に維持管理・運営は地域住民によって自主的かつ主体的に行われている点が特徴的です。

活動を通してガーデニングの技術や植物に関する知識などを学ぶとともに、活動仲間同士での新たなコミュニティも生まれています。

また、地域全体においても、緑の空間が生み出され、市民にとっての憩いの場を創出しているという点においてもメリットがあるものと考えられ、私達の自治体でも参考にできる要素は多分にあると感じました。

充実した調査の後は、ガーデンで採れた有機栽培による野菜をふんだんに使った料理を堪能。…美味しかった♥



住民の声に耳を傾け、地域全体のバランスを見ながら対応できる そんな庭師になりたい！

住民をもっと巻き込むためにはどうしたらいいか。

住民参加を成功させるためには何が必要か。

研修の初日にコーディネーターのダンさんからいただいた重要な質問でした。

私は、自治体が住民と情報を共有することに努力し、「できること」と「できないこと」を住民と共有し、どう取り組むかを共に考えていくことだと思いました。

そして、そこに必要なことは、自治体職員一人ひとりが、地域や住民の声を聞き、サポートできることを考え、どうしたらお互い(行政と地域・住民)のできることを活かす(生かす)ことができるかを考え、取り組むことだと思います。

以前から、行政が担う公益ってなんだろう？自治体は、何のために存在するのだろう？どんな必要があるて存在するのだろう？と考えていました。この研修で、住民が核にある行政を見聞きし、この答えは、地域の中にあると強く感じました。

住民参加によるまちづくりは、自治体の抱える問題は、地域の中に答えがあり、地域の中から答えを見つけることが重要であることを自治体(自治体職員)が認識することから始まるのかもしれません。

ダンさんが最後に話をしてくださった庭師の話が、とても心に残りました。

「私たちは、木や花でなくていい、それらを育てる庭師である」

住民の声に耳を傾け、地域全体のバランスを見ながら、対応できるよい庭師になりたいと思いました。
生物多様性・生物生産性の高い持続可能な庭を目指して…。



↑仲井さん(左)と植さん(右)その②♪



クチコミ☆イベント情報！



↑前回、風のたより2010 終了後の集合写真☆全国各地から多くの仲間が集結！(2010/03/20)

昨年3月に続き、今年も「風のたより」が開催されます！

今年のイベントでは、全国各地で、『まちを元気にする活動』を展開するグループからプレゼンしていただくほか、ゲストコメンテーターの方々からのコメント、そして参加者皆さま同士による、気づきと交流のワークショップが行なわれます。更に今回は、映画「ふるさとがえり」も上映されるとのこと♪

まちを盛り上げるヒントがたくさん詰まった学びの場、仲間たちとの出会いの場になりそうですよ。

■開催概要

日 時: 9月24日(土)10:00～(開場9:30～)

会 場: 神奈川県小田原市旧片浦中学校体育館
(住所: 神奈川県小田原市根府川41)

費 用: 一般2,500円 学生1,500円

交流会: 「竹取御殿 小田原店」(会費4,000円)

■プログラム概要

★岐阜県恵那市「心の合併」

映画づくりで絆を結ぶ市民総参加「ふるさとがえり」上映会

★トークセッション えな“心の合併” Project

★まちづくり実践活動団体の活動紹介

★ワークショップ「理想のまちってどんなまち？」

【出演グループ】

★小田原まちなか市場 ★NPO法人札幌ビズカフェ

★NPO法人大森まちづくりカフェ ★ばうむ合同会社 ★えな“心の合併” Project

★彦根市花しょうぶ通り商店街・LLPひこね駅の駅

【コメンテーター】

吳 哲煥さん NPO法人CRファクトリー代表

大沼 瑞穂さん 東京財団研究員・政策プロデューサー

中西 規之さん 財団法人日本都市センター 主任研究員

【申込み先】

<http://goo.gl/0jHNP> (※なお、イベント詳細については、風のたよりスタッフである後藤好邦さん(山形市)へお問い合わせください。)

August 2011 OM Newsletter



たとえ時間がかかったとしても
「自分たちの手で復興させたんだ」と胸を張れる、
そんなまちづくりをしていきたい！

レポーター 岩手県宮古市役所 那波 昌幸 さん

あれから5ヶ月

持ち主の元へ帰る「思い出の品」は一割にも満たない…

宮古市の那波です。3月に北上市で行われたカイゼン万博で山形市の後藤さんと知り合ったことがきっかけでOMに入会しました。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

私は今、がれきの中から回収された位牌やアルバム等、いわゆる「思い出の品」の管理を担当しています。あれから5ヶ月以上が過ぎ、中にはアルバム全体がカビてしまったり、何が写っているか判別がつかなくなってしまったものなど、かなり酷い状態になってしまったものも少なくありません。夏の暑さの中、遺留品を展示している会場は鼻に着く独特のにおいが立ち込めていました…。

5ヶ月が過ぎた今現在でもまだ数多くの遺留品をお預かりしていますが、持ち主の元へ帰る遺留品は一割にも満たないのが実際のところです。この写真に写っている人たちは今どうしているのでしょうか。新しい一步を踏み出すために、あえて「探しに来ない」という選択をしたのなら、それに越したことはないと思います。

**私自身が関わった部分はほんのひとつの側面にしかすぎない。
だけど、そんな中で自分が感じたことを率直に伝えたい。**

さて、僭越ながら今回こうしてニュースレターに寄稿する機会を与えて頂きましたが、正直言って引き受けているのかどうか迷いました。被災地の現場で働いていて、今感じている思いを伝えてほしいとのことでしたが、私はまだそうした仕事的にはヒマなほう(?)だと思っています。経験したことこそ多くはありません。

職員の中には連日被災者と向き合い、それこそ昼夜を分かたず震災対応業務にあたっている者も多くいます。そんな先輩や同僚を差し置いて私なんかがこんなところで好き勝手なことを書いてもいいものだろうか?

被害の全体像すら見えていない私が、自分自身のちっぽけな了見で主観的な考えを晒してもいいものだろうか?

ツイッターで呟くと原稿にするのとでは大きな違いがあるのではないか?などなど、不安や迷いは今でも尽きることはありません。

ですが、私自身あの震災を目の当たりにし、文字通り瓦礫の山と化したまちの中で色々と見聞きしたこと、感じたことがあります。自分が関わった部分は今もなお続いているこの大災害のほんのひとつの側面にしかすぎないのかもしれません、そんな中で自分が感じたことを率直に伝えること、それが自分自身にできることなのかなあと考え、キーボードに向かうことにしました。

私が今感じていること。それは、「被災地とそうでないところとの“ギャップ”」「傾聴”するということ」「“被災者支援”的在り方」この3点です。

**OM勉強会に参加して感じた『ギャップ』。
だけど、そんな中で自分が感じたことを率直に伝えたい。**

いさか前置きが長くなってしまいました…。さて先日、OM勉強会in秋田に参加させていただきました。OMの勉強会に参加させていただくのはこれが初めてで、期待していた以上に多くの感動と気付きを得ることができました。準備に携わった皆さん、そして一緒に勉強会を作り上げてくれたOMメンバーの皆さんには本当に頭の下がる思いです。

一方で、勉強会以外の部分でも様々な気付きを得ることができました。自分としては、勉強会以外のところで感じたことの方が“気付き”的ボリュームが大きいかもしれません。そのひとつが、被災地とそうでないところの「ギャップ」です。



勉強会開始の30分程前に、岩手県で最大震度5強を観測した大きな地震がありました。秋田県でも震度3が観測されました。歩いていたせいか私は地震の揺れに全く気付かず、会場へ向かう道すがら眺めていたツイッターのタイムラインで地震が起きたことを知りました。

宮古では防災無線が鳴り響いて大騒ぎしている様子がツイッターから伝わってきて、私は激しく動搖しました。大変なことが起きた。震源は宮城県沖、ということは津波の恐れがある。このまま勉強会へ向かうべきか、戻るべきか…。すぐに津波の心配が無いことがわかりましたが、この地震の規模だと津波が無くとも建物などの被害が出ているのではないかという心配がありました。

しばしツイッターを眺めていて、どうやら大きな被害は出ていないようだとわかり、逡巡した末、そのまま勉強会の会場へ向かうことになりました。

**岩手沿岸で起きた地震にも、いつもと変わらない
穏やかな街の様子に私は愕然とした。
私自身、被災地の話を聞いてもらいたいことに気付いた。**

ようやく画面から目を離し、秋田駅周辺の様子を見まわして、私は愕然としました。至って平然とした、いつもと変わらない街の様子がそこにありましたからです。街を歩く人達に動搖は見られませんし、地震があったことを気にかけている様子もありません。新幹線が非常停止したため、秋田駅のコンコースでテレビ画面に見入っている小さな集団があつたほかは、いつもの穏やかな秋田駅周辺でした。その時、「ああ、ギャップって、こういうことなんだなあ…」とつくづく感じました。

私は何も全ての人に「被災地の人の気持ちになってみようよ」と言うつもりはありません。無理だからです。断言します。しかし、自分自身そう思っているはずなのに、地震の事を気に留めている様子もない秋田駅周辺の人たちを目にした時、どうしてあんなにもガッカリしたような気持ちになったのだろう?と思いました。悶々と考えてくうち、他ならぬ私自身が、被災地のことに関心を持つてもらいたい、話を聞いてもらいたいと思っていたことに気付きました。

この気付きは、交流会に参加したことで確信に変わりました。

**あれっ、どうしたの?
みんな震災のこと、気にならないの??**

勉強会後の交流会で、私は隣り合った方々にあえて「宮古市から來ました…」と枕詞をつけて自己紹介をしていました。今になって振り返ってみると、こう言えばきっと被災地から来たということを察してくれて、色々と話を聞いてくれるのでないかという下心があったのだと思いません。

このことについて、どうしてもっと深く突っ込んで話を聞いてくれないのかと訊ねてみると、何人かの方が『とてもセンシティブでプライベートな話題なので、どこまで深く聞いて良いものかわからなかった。』と答えてくれ、なるほどなあと思いました。

アドバイスも、気の効いた声掛けも、 ましてや同情の涙も必要ありません。 ただただ、地域の人の生の声に耳を傾けて欲しい。

実際、私も避難所では、避難している方々にどう声をかけて良いのかわかりませんでした。しかし、思い切って「津波の時はどうしてたんですか？」とか「ここ(避難所)を出た後どうするんですか？」などと訊ねると、結構皆さん色々な思いを話してくれました。

私と同じように、自分自身の体験や思いを聞いてもらいたいと思っている人は多くいると思います。あの大災害を体験した全ての人にそれぞれのストーリーがあります。

もし皆さんが被災地を訪れる機会があれば、是非地域の人の生の声に耳を傾けて欲しいと思います。同情して涙を流す必要もなければ、適切なアドバイスをする必要もありません。ましてや、気の効いた声掛けも必要ありません。ただ、話を聞いてくれるだけで充分なのです。そして、「相手の話を聞く」ということの大切さは、何も被災者支援に限った話ではないかもしれません。

北海道を旅する中で出会った人たちとの気兼ねない会話。 話を聞いてくれたことが本当に嬉しかった。

余談ですが、8月の上旬に1週間ほど休みをもらい、キャンプしながらバイクで北海道を一人旅してきました。

たまたま同じフェリーに乗り合わせたライダー、ふらりと立ち寄った食堂のおばちゃん、解放感たっぷりの野湯と一緒に浸かったおっちゃん、キャンプ場で同じ火を囲んだお互い見知らぬ旅人達…。みんなが私のバイクのナンバープレートを見ると、こう言ってくれました。

『お前、岩手から来たのか！ 地震どうだった！？ 津波大丈夫だったか？』

休みの間は仕事や震災に関する事から一切離れようと思っていたのですが、こんな風に次々尋ねられるせいで、結局離れることができませんでした(笑)。それでも、気兼ねなく話を聞いてくれたことが本当に嬉しく思いました。

「おっちゃん、大丈夫じゃなかったよ。大変だったのよ。聞いてよ、こんなことがあってさ…」と話が弾んだのは言うまでもありません。

被災者をいつまでも”被災者”的ままに しておくわけにはいかない。 生活の自立という根本に立ち返った支援の在り方を 考えていかなければならぬ。

今現在では、すでに宮古市の避難所は全て閉鎖されていますが、被災者支援の在り方について本当に今まで良いのだろうかと、避難所の様子を見ていて思いました。

被災者に対して何かを「してあげる」ことが本当にその人にとっての支援になるのだろうか…？と。

避難所に居れば食事が出来ます。必要なものはリクエストすれば手に入れることができます。避難所によっては、清掃や身の回りのお世話も担当職員やボランティアスタッフがやってくれるところもあります。確かに、食事や物資の提供、生活支援は一時的には絶対に必要な活動です。

しかし、その活動をいつまでも続けることは、逆に被災者の自立の妨げになるのではないかと感じました。

私たちはいつまで“被災者”でいればよいのでしょうか？被災者をいつまでも被災者のままにしておくわけにはいかないのです。

「避難所を出ると物がもらえなくなる。だからギリギリまで避難所に居たい」と仰る方がいました。そうした方々へのケアとして、きちんと仮設住宅でもニーズ調査をして、足りないものや必要な物を届ければ良いではないかという発想もあるかもしれません、生活の自立という根本に立ち返ると、それは自立の妨げにしかならないのではないかと思えて仕方ありません。



被災者一人一人が自分の足で歩けるように支えること、 そして、最後には支えそのものを外すような支援の在り方へ

被災者に直接働きかける活動は、被災者の反応をダイレクトに感じることができるため、支援者の満足度も高いのだと思います。そうした直接的な支援を否定するつもりはありませんが、被災者一人一人の自立を促すためには、直接的な支援より間接的かつ長期的な支援のウェイトを今後は高めていかなくてはならないと思います。

被災者一人一人が自分の足で歩けるように支えること、そして最後には支えそのものを外すこと。そのような支援の在り方を考えていかなくてはならないと感じています。

たとえ時間がかかったとしても、 自分たちの手で復興させたんだ！と胸を張れるまちづくりへ

被災者一人一人が自分の足で歩けるように支えること、そして最後には支えそのものを外すこと。そのような支援の在り方を考えていかなくてはならないと感じています。

大きな支援を受けて迅速に復興を成し遂げるのも一つの正解かもしれません。ですが、時間がかかるって、数十年後に振り返った時に、「このまちは自分たちの手でここまで復興させたんだ」と一人一人が胸を張れる、そう思えるようなまちづくりができるたらいいなと思います。

先日、宮古の街でお酒を飲んでいると、お店の人方がこんな話をしてくれました。

『瓦礫の片付けも、仮設住宅の建設もほとんど終わっちゃったでしょう。そしたら、急にお客さん少なくなっちゃったんだよね…。』

この言葉に、被災地の現実が表れているように感じました。避難所が全部無くなつて、皆が仮設住宅に入ることができて、ひとまず落ち着いたね、良かったね…ではないのです。ある程度状態が落ち着いてくるとマスコミも見向きもしなくなるでしょう。そうなれば、私たちは忘れられてしまうかもしれません。

宮古市の復興は、これからが正念場なのです。



木の実☆あつめ

子ども時代の生活の中で、「この場所を大切にしたい」
そんな“こころ”を育む“場”をつくりていきたい

仙台市役所 柳谷 理紗さん

メンバーの知られざる趣味や特技、活動などへの思い、そんな素敵な“木の実”を紹介します。

色も形も違う色々な木の実をあなたの心のポケットに…

◆自然・風土・歴史から、今後のまちづくりや建築を考えていきたい

学生時代、建築設計を勉強するなかで「自然・風土・歴史から学び、今後のまちや建築を考えること」「一人一人の能力が活きる環境づくり」を大切にしたいと思うようになり、学生時代から関わるようになったまちづくり活動に、社会人になってからも引き続き関わっています。

今回の東日本大震災では、関わりのあった人や場所が、多大な被害を受けてしまうことになりましたが、震災から立ち上がる元気を取り戻すことにつながればと、始まった取り組みを今回ご紹介します。

◆子どもたちの創造力や

よりよい人工環境への意識の芽を育む活動を展開！

「建築と子供たちネットワーク仙台」とは、建築や都市のデザイン手法を用いて、子どもたちの創造力を培い、よりよい人工環境への意識の芽を育むための教育活動を行っている建築、教育、行政関係者から成る市民団体であり、1993年より活動が開始されています。

建築設計の授業に講師でいらした設計事務所の方が取り組みを紹介してくれたことをきっかけに、興味をもち企画に参加するようになりました。

堤焼の登り窯(青葉区堤町)のなかにロウソクを灯しワインを飲む企画や、仙台市景観重要建造物である旧丸木商店店蔵(青葉区南木材町)での子どもたちとの土壁塗りの企画が行われました。

レンガの空間を美しく照らす光を感じ、店蔵を支えてきた重厚な梁に触れながら磨き上げ、土の感触を確かめながら土壁を塗る作業を、大人も子どもも夢中になって取り組んだことが大きく心に残っています。

◆子ども時代の生活の中で、

「この場所を大切にしたい！」と考える場をつくりたい

今回の震災では堤町の六連の登り窯は、上部三連が倒壊。また仙台市景観重要建造物である旧丸木商店の店蔵の白壁にも大きなひびがあり一部は崩落しました。そこで、7月下旬には倒壊した登り窯のレンガをきれいにするワークショップを実施しました。また、9月には、近隣の小学校3年生の授業のなかで、旧丸木商店の修復に併せて新たに設置される格子戸の一部を子どもたちがデザインする授業を行います。

自分自身の手をかけると、その場所を大切にしたい。という気持ちがいつまでも心に刻れます。子ども時代の生活のなかに、触れることがでたり、想いに触れ、考えるきっかけがたくさんあつたら良いな。そんな機会を自分がつくれるようになりたいと、活動に関わっています。



10月2日(日)には、建築と子どもたちのこれまでの活動や被災後の取り組みを伝えていく「ふれよう、学ぼう、デザインしよう“昔の建物”～子どもたちが『伝える』仙台奥州街道歴史的建造物～」というタイトルで、ワークショップ・シンポジウムの開催も予定しています。こちらもぜひご参加ください！(詳しい内容はブログにて)<http://architecture-and-children-sendai.blogspot.com>

◆子どもが『遊びたい』という環境をつくりていきたい！

阪神淡路大震災では、しばらく経ってから心的外傷後ストレス障害(PTS D)と診断された子どもたちがいたということが、東日本大震災後多くのメディア等でも発信され、子どもたちの心のケアの必要性が、伝えられていたように感じます。

そんななか共に活動をしているNPO団体「西公園プレーパークの会」の仲間が石巻市河北地区で被災しました。その地域は津波で多くの子どもたちが亡くなった地区の方々の避難所が3箇所開設された場所に近接したところ。

そこに「亀が森公園」という、神社の境内と豊かな鎮守の森のなかにある公園がありました。被災した子どもたちが遊べる場所をしたい！という仲間の一言により、地元の有志の人たち、西公園プレーパークの会のメンバーで、「遊んでみよう会」を月一回のペースで開催することになりました。

6月から計3度開催していますが、そこで改めて感じ、気づくことがあります。来る子どもたちは地元の子どもたちが多く占めていますが、「小学校も避難所となり、遊ぶ場所がなくて。子どももパワーが有り余ってしまって、家のなかで落ちつかなかったけれど、こんな場所があると良いね」というおばあさんから言葉。

また、開催していると石巻や周辺地域でも、校庭や公園が仮設住宅や施設の建設地になり、子どもの遊び場が足りない。という地域の方からの「どうにかしたい」という声に出会う場面も増えています。

◆非日常な今だからこそ、自分らしくいられる場所をつくりたい。

私自身が大学生のとき、中越沖地震が発生したのですが、そのときの出来事が、今回の東日本大震災のなかで仕事や活動をしている上で脳裏に浮かぶことが多く、そのときに感じたこと、大切だと思ったことに基づいて行動をすることができたり、助けられることになりました。

中越沖地震の際には、大学内のボランティアセンターのバスで学童保育にやってくる子どもたちの遊び相手になることに柏崎に2度ほど行ったことがありました。親達が震災復旧で忙しいので、感じ取りやすい子どもたちは、我慢してしまったり、甘えられなかつたり、言葉で気持ちを出せずにいます。

遊びで夢中になったり、わくわくしたり、こんなことやりたいという湧き上がる想いを感じることが、元気になるきっかけになる。震災のあった非日常な状態が続くなかだからこそ、特にのびのびと自分らしくいられる場所があると良いなと思います。

自分たちの関わる範囲はとても小さいものだけれども、いろんな場所で子どもの遊びを大切にしようという動きが起こっていくように、行動していくたいと思います。



平成23年立
平成23年度 (財)宮城県建築住宅センターまちづくり活動支援 助成事業
JA全国交流基金 助成事業

2011建築と子供たち日米フォーラム

歴史的建造物を
『伝える』
デザインワーク

昔の建物にふれ、学び、
未来をデザインする力を育もう

開催日：2011年10月2日(日) 10:00～17:30

会場：東北工業大学一番町ロビー 4階ホール

建築や都市のデザイン手法を使って子どもたちの創造性を育む教育法「建築と子供たち」の提唱者アン・テラー博士を迎えて、昔の建物を活かしたデザイン学習をテーマに、ワークショップとシンポジウムを行います。

